

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年四月十六日(第六回)

(佐藤 亮照)

今春も期待通りに顔見せし残雪溶かす福寿の家族

暗闇にパッと輝く蛍光灯揺れ続く中安堵の溜息

炊き出しの行列つくるひとびとに惑いつつ取るわが家の夕げ

(佐藤 志亮)

雪の寺薄墨描く白と黒瞑想ふける色無き世界

(松田 昌泰)

今朝も雪遠のく春に軒下の忘れた風鈴溜息をつく

(黒沼 貞志)

しあわせの尺度を語り気付かされ比較社会に組み込まれし我

久々の妻の不在で慣れぬ家事期待はずれのたまの独身

雨水すぎ屋根打つ雨音微かすぎ口で伝えて妻と味わう

お三度の休みも併せてプレゼント物にもまよる妻のよろこび

晴れの日の友の陰膳考える娘のさずなに想いを馳せる

「東日本大震災で詠みし八首」

はじめてのブラックアウト増す恐怖さらに追いつく車のラジオ

復帰した映像目にして言葉無し「Hell on earth」この世の地獄

ふたたびのブラックアウト真夜中に心にゆとりか被災地想う

懐かしきつつまじき日々よみがえり計画停電これもまた良し

便利さも慣れてしまえば当たり前前大震災で見直す機会

自然には敵わないよと毛沢東主義が達えど妙に納得

天災が人災隠すこともある語り伝えてつなぐは次世代

海外のメディアが伝える高潔さ限度もあるよとひとりつぶやく

(中村 昌平)

春風に初めて感じる杉花粉空は晴れても心は晴れず